

健康文化

大学時代の思い出（3）

岡島 俊三

昭和20年に入って、B29の空襲も様相が変わってしまった。それまでは爆撃の目標は軍需工場に限られていたが、焼夷弾と爆弾とで市街地の無差別爆撃となった。夜間にまず照明弾で市内上空から市街を昼間のように照らし、低空からB29が一行縦隊に進入して、一夜で市街地を焼け野原と化してしまうというものであった。

名古屋も3月11日に空襲があり、3月19日は市街に焼夷弾と1トン爆弾のはげしい大空襲があった。八事の下宿から眺めていると、夜中にB29が南方から市街に進入し、照明弾で市街地を照らし出し、続いて一機ずつ低空で市内に侵入してくる。わが軍の探照灯がこれをくっきりと捕らえて追尾する。そして地上から曳光弾つきの機関銃で射撃するがさっぱり命中しない。これらの模様ははっきり観察できるのであるが歯痒い限りである。市街は広範囲に大火災が起こっている。

翌日になると八事の街道を東方の市外に向けて、焼けこげた家財を積んだりヤカーなど引っ張って、沢山の人の群れが落ち延びていく姿が哀れであった。

午後大学へ出てみたら、研究室の先輩の生源寺さんの白壁町の自宅が焼夷弾の直撃を受けて全焼とのことであった。ご家族に怪我はなかったそうであるが、お気の毒であった。

この頃になると連日連夜、空襲警報が発令されて、睡眠不足になるし、疲れ切ってしまった。夜中に、その都度起きて防空壕に入ったりしていると体が冷えるし大変である。幸いにして八事の下宿は市内から離れているし、まさか標的にされることもあるまいと、夜中に起きず寝ることに決め込んでしまった。

3月25日の夜中にズドンという振動と大音響にびっくりして飛び起きた。締めであった雨戸が吹き飛ばされている。至近距離の地点に爆弾を落とされたものと直観した。大急ぎで衣類をまとい防空壕に駆け込んだ。下宿の家族の方も集った。

市内の方を眺めると、B29が一機ずつ低空で市街上空に進入して、焼夷弾、爆弾攻撃の最中で、爆音も聞こえるし、大火災で空は真っ赤に照り輝いている。

その時、B29 一機が八事の方に接近してくるのがあり、探照灯で照らし出されていたのだが、高射砲弾が命中して、近くに火だるまになって落下するのを目撃した。それからも暫く市内への攻撃は続いた。

夜が明けると早速、撃墜された飛行機の現場を見るために駆けつけた。2キロほど南東で現場にたどり着いた。沢山の見物人が集っていた。B29 の機体は爆発を起こしたのか、すっかり破壊されて、広い範囲に残骸は散乱していた。女性兵士の死体が無残な形で放り出されて横たわっているのを目撃した。すっかり興奮を覚えた。

午後、大学へ駆けつけた。東山にある大学周辺にも爆弾、焼夷弾が多数落とされて、大学の木造校舎の形は一応残ってはいるが、硝子戸は殆ど破壊されて風が吹き通しである。物理学科の一年生の長谷川君が宿直をしていて、焼夷弾の直撃を受けて即死。数名負傷したことが知らされた。当時学生も交代で宿直に当たっていたのである。

大学も危険にさらされており、ここでの活動は不可能に近いことを直観した。翌日から実験室の片付けなどに励む。電気、ガス、水道なども止まったままなので大学の機能は麻痺状態である。

大学では急遽、疎開する方針が決まった。物理学教室がまとまって疎開できればよいのであるが、急にそんな疎開先を見つけることは不可能である。5 研究室あるが、それぞれ勝手に急いで疎開先を見つけて疎開するようにとの方針が決められた。

困ったことに、私の卒業研究で所属していた早川研究室は、責任者の早川助教授が3月10日の東京大空襲で行方不明になられた状態で、研究室に所属するのは、大学院特別研究生の生源寺さんと私の二人だけである。他に写真の技師で非常勤で研究室に来ている原田さんという方がいたが、途方に暮れる状態であった。

3月28日に亡くなった長谷川君の葬儀が行われた。この日には敵が琉球列島に上陸してきて、激戦展開中との嫌なニュースも飛び込んでくる。

挙母(現豊田市)から通っていた原田さんから疎開先として猿投の農学校はどうであろうかとの提案があり、早速、当たって砕ける覚悟で3月29日、生源寺さんと原田さんが猿投の農学校に交渉に出かけた。結果は農学校で承知してくれることになり、一安心した。

翌日からは疎開する荷物の選択や荷造りで忙しくなった。

4月1日には猿投への疎開を希望する二年生の学生の佐野君と三人で猿投の農学校を訪ね、貸して頂ける三部屋の検分をする。

疎開する荷物は大事な測定器などに限定し、アルコール、ベンゼンなど可燃性の薬品などは、空襲を受けたときに爆発しないように校庭に穴を掘って埋めることにする。

物理学科の他の4研究所は長野県の学校とか寺などを探して交渉し、大体疎開先を決めたようである。

4月7日は午前から午後にかけてB29が150機来襲。この日の空襲は工業地帯に限られていた。

猿投への荷物輸送のトラックがなかなか見つけれず困ったが、4月5日にやっと予約ができて、4月10日に荷物を運ぶことに決まった。主任教授の宮部先生から、疎開先では特に規則正しい生活をするようにと注意を受けた。

4月10日、いよいよ猿投への荷物運送。雨の中、荷物をトラックに積み込み、トラックに便乗して猿投へ。荷物を猿投農学校のお借りした部屋へ運び込み、疲れて新川の実家へ帰る。名古屋の下宿は引き払い、家から三河線で猿投へ通うことにする。朝夕の電車は混み合っただけで、空襲のおそれはなく、安心して猿投へ通うことができるようになった。

連日のように空襲警報は発令されるけれども、空襲のおそれは皆無の場所であると安心して、夜もよく眠れるようになり幸せであった。

猿投農学校でお借りした1室に運び込まれた荷物を整理して、最小限度の実験ができるように準備作業に入る。暗幕を張り巡らして暗室を作ったり、電気容量を上げるための工事を依頼したりする。ガスの設備がないため必要な硝子細工ができず何とか工夫しなければならなかった。

一番の悲劇は指導教官不在の研究室で、大学院の学生、3年、2年の学生の合計三名の孤立した研究室である。原書の輪読会とか、あとは各自が本を読むという生活が始まることになる。自学自習の生活である。

大学卒業後の進路についていろいろ考える。卒業すれば召集されることは必定である。たまたま海軍の技術研究所で大学の物理学科の卒業者を求めているとの情報を得た。一般兵として入隊するより、研究所に就職する方がベターではないかと考え、5月の初めに応募する決心をした。

5月14日、大学に連絡するため名古屋に向かう。空襲警報が出て名鉄電車は堀田で運転停止となる。市電も動いていないので、やむを得ず防空頭巾をかぶって高辻の方に歩き始めた。暫くすると西の空からB29の数十機の編隊が真っ正面から向かってくるのを発見した。驚いて、その時は本当に恐怖に襲われて、道端の防空壕にもぐり込んだ。投下された爆弾のびゅーっという不気味な音に続いて、強い振動と轟音に耳をふさいだ。後で判明したところでは、愛知航空機

が爆撃されて、勤労働員の学生も多数死傷したとのことであった。

午後になって漸く東山の大学に着く。生物学教室の一部と航空医学研究所が全焼していた。

この日の空襲は B29、400 機の来襲で最大規模のものであった。

この頃、名古屋市街はすっかり焼き払われていて、一変した風景を呈していた。平常、火事のあとは燃え残りの木材などの残骸があるものであるが、焼夷弾爆弾のあとは燃えるものはすっかり燃え尽くされ、僅かコンクリート建造物を残して、丸裸のきれいさっぱりとした風景に変わっていた。見通しが非常によくなり、東海道線や中央線などの汽車が煙を吐いて走る姿が遠方から見えたりして異様な感じを受けたりした。

そのうちに田舎だからと安心していた西三河地方も安心できなくなってきた。敵の艦載機が出没するようになったのである。艦載機は低空で突如出現して機銃掃射をするのである。猿投に通う三河線の電車も度々攻撃を受けるようになった。

6月になって海軍の技術研究所への就職が決定し、6月12日に沼津に疎開していた海軍の技術廠から連絡があり、訪問することになった。係官から現在緊急に磁気魚雷の防禦に関する研究を進めているが、人手が不足しているので、なるべく早く、卒業前であってもこれに参加してくれないかとの要請を受けた。あまり突然なので考えさせてくれと言って即答はさけて引き下がってきた。

7月に入って米機 2000 機が日本各所を爆撃し、昼夜を分かたず空襲におびえている情勢になる。

8月6日、広島に特殊爆弾を落とされたと報道された。これが原子爆弾であることを直感した。

何故かという、坂田教授から原子核の講義の時に原子爆弾の原理についての話を聞いていたからである。

それはベルリンの核化学者ハーンとシュトルスマンによる発見「ウラン 235 の中性子照射によるバリウム等中重元素が発生する現象」とこの現象の本質を知るために行われた「核分裂反応の存在」という論文を説明され、核分裂により発生する複数の中性子を利用して連鎖反応を起こすことが出来れば、普通の化学反応で生じるエネルギーの数千万倍のエネルギーを取り出すことが出来るというものである。もしこれが兵器に利用されたら、恐るべき兵器の出現になるであろうという話だった。

この爆弾は8月9日には長崎にも落とされた。さらにソ連の日本に対する宣戦布告がなされた。

日本もいよいよ重大な危機に陥ってしまった。8月15日正午、重大放送があるというので、猿投農学校のラジオの前に集まった。聞き取りにくい陛下の玉音放送であったが、戦争は終結されたことを知らされた。米英ソに対し無条件降伏の詔書の煥発であった。

ただ啞然とするばかりであった。日本はどうなるのであろうか。日常生活はどう変わるのであろうか。さしあたってどう行動すべきか、さっぱり分からず、おろおろするばかりであった。ただ一つ嬉しいことは空襲警報がぴたりと止まって、夜は安心して寝られるようになったことである。

9月20日卒業式が行われることになる。当日は昭和区鶴舞の医学部講堂に集まる。理学部卒業生は18名。うち物理学科は8名であった。

渋沢総長の訓示は次のようなものであった。

1. 戦時色を払拭し、独創的な自由な研究
2. 秘密主義の削除
3. 大和精神

等を強調された。戦時中も一貫して「以和為貴」を唱えておられたので、大和の精神を特に強調された。

式後、卒業生18名は同窓会館でささやかな祝賀会に招かれた。どこで工面されたかヤカンのお酒が振る舞われた。

その後、東山の理学部に移り、柴田学部長の訓示があった。今までの詰め込み教育を排して、独創的な研究に邁進するようにと励まされた。

卒業式は終わったけれども、未だ猿投に疎開荷物が放置されているので、大学へそれらを返送する準備をする。9月末になって、やっと疎開荷物をトラックで大学へ運び返す。

これでやっと大学生活を終えたことになる。顧みれば、昭和17年10月、太平洋戦争の最中に入学し、昭和20年9月、終戦直後に卒業と、全く戦争と重なったの学生生活であった。この間半年は学徒動員で大学を離れ、最後の半年は疎開をしたし、昭和19年の終わり頃から昭和20年の3月までは空襲に脅かされるなど、満足な教育を受けることが出来なかった。結局、正常な教育を受けたのは3ヶ年の修業年限のうち、前半の1年半くらいのものであった。誠に波乱に満ちた学生生活を経験した。

(長崎大学名誉教授)